

寒からしめるに充分な事例が多い。

一方、家庭では、遊び相手がないために、家にとじこもりきりで、猫が唯一の遊び相手といった生活を毎日くりかえしているものもある。

精神薄弱児の日常生活において、その自由な時間の用い方は、きわめて重要である。

一般によくいわれるように、彼らが、これを正しく生かすときには、その精神的発達を促がし、精神的内容を豊かにし、社会に適応した健全な人格を養うことに役立つであろう。その反対に用い方をあやまるときは、社会的不適応に陥るであろう。このような意味で精神薄弱児の余暇指導は、その教育の中で不可欠の重要な位置を占めるであろう。

余暇の利用ということは、習慣や態度の問題なのである。その意味で日常の生活指導の一環として、再三反復して指導が行われなければならないでしょう。

そして、指導の対象は、精神薄弱児一般ではなく、一人一人の個人であり、しかもその個人差が著しいことから、余暇指導も個別的に考えられねばならないことは言

うまでもない。そこで個人に対する余暇指導の手続きとしては、

(一)まず個人が余暇の過ごし方のどこに問題があるのか  
集団生活への参加に関してか、あるいは余暇の技能  
に関してか、などの究明が必要である。

(二)それでは、その問題がなぜ起こったのか、心身の発達状況が原因なのか、性格的に問題になるのか、などの原因追求がなされねばならない。

(三)指導対策が個人、個人の所属する学級集団や家庭に  
対してそれぞれ樹立されてのちに、指導の実践がなされ、その結果が反省されて、さらに次の指導対策が発展的に、末広がりの取られていかねばならない。

## 養護施設における

## グループワークについて

成田 哲 恵

人間の最も基本的な要求は、自己保存と種属保存の要

求であるが、これらの要求は、みずから単独で充すことは不可能で必ず他の人びとや集団によつてのみ充される。即ち、共同生活に対する要求（社会的要求）は、右の二つの要求から派生する第三の基本的要求で身体的あるいはその他の様々な要求が多少充されていなくても、集団生活において十分に安定感が充されているとあまり不幸とは感じないのである。人間は生まれると、家庭環境に学校環境に、更に職場環境にと生活の場を拡大していく。環境が人間生活に重要な意義を持つ限り、グループから人間を切りはなすことは出来ない。グループの中において、個人の人格が尊重され、自由で差別のない関係のうちに組立てられ、相互に他人の意見を尊重し、場合によつては、他人の立場を考え、同情し、協力し、社会性への理解が深められ、更に文化的向上へと発展していくわけで、グループという社会性のある集団を通じてのみ個々の成員が安定した社会性のある人間として生活することができるのである。

児童収容施設の中で、家庭に代つて児童保育を実施する機関である養護施設の児童は、年令的に非常な異りをも

つて構成されており、その為に興味や関心もおのずと相異がある。この様な児童の任意性を尊重し、自発的に児童自身の生活を豊富にさすのがグループ保育である。収容施設での指導目標は、社会人として一つの役割りを得ることが出来、幸福な生活を営むことが出来る生活能力を身につけさせることであり、特に、社会的適応力を高めることに重点がおかれている。児童収容施設における人間育成について社会への復帰までに、更にそれ以後の生活系の中に、生活指導、学習指導、ケースワーク、そしてグループワークがあり、それらのものが混然一体となつてこそ各人の健全な育成が成り立つのである。養護施設が社会事業の一つの体系の中に、児童福祉事業の一部面を担当するものとして位置づけされており、近代社会事業の専門技術の一つであるソーシャル・グループワークがとり入れられなければならないのは当然のことである。

ところがアメリカから輸入されたこのソーシャル・グループワークの理論・技術的研究は、我國の實際面においてその矛盾と困難さを与えている。理論にかなつたグル

ープワークが出来ないとすれば、施設側に立つて定義そのものを分析してみる必要が生じてくる。

グループワークの定義の共通した特質をひき出してみると、次の通りになる。

- (1) 専門の指導者（グループ・ワーカー）が指導するもの
  - (2) 任意に参加できる自発的集団
  - (3) 余暇の利用
  - (4) 興味を中心とするもの
  - (5) 一種の教育的活動
  - (6) グループの有する目的は、集団のなかの相互作用によつて、個人のパーソナリティの健全な発達と環境への適応と、集団自体の社会的に望ましい発達
- 養護施設に於ける集団は、家族集団から切り離されており、又、年令的、性格的、知能的に幅のある児童集団である為に、グループワークを行う場合、グループワークの定義の特質には、あてはまらない部分が出て来るのである。即ち、四つのグループワークの理論的要素（1）（2）

（3）（4）が、養護施設内でソーシャル・グループワークを行う場合の矛盾と困難性を産み出しているのである。

この四つの問題を、養護施設側の立場に立つて、実情に即した独自の解釈を行えば、一応定義の上に現われた矛盾は解消することができる。即ち、理論的にいうならばあくまで養護施設では理論にかなつた眞の意味でのソーシャル・グループワークを行つていとはいえず、施設側からいえば、これらの矛盾はあくまで矛盾として消えさらないのである。従つて定義にこだわることなく、独自の解釈により、各クラブ活動やレクリエーション活動を行うならば、養護施設においても、グループワークが成立することになる。

もし、この様な解釈の仕方が、あくまで、一般のグループワークの理論に反するとするならば、我が国の養護施設の実情に即した。ソーシャル・グループワークの定義を改めて与えなければならぬことになるであろう。